

21/01/2020 Tue

3連休は十分に満喫できましたかね？今日は朝から晴天、気温も上昇しやっとなZらしい夏がやってきたという感じです。Wellingtonでの生活も2週目に入り、みんなかなり慣れてきました。ただ、疲れと大きな気温の変化や予想外の寒さなど、色々と重なっているからかもしれません。体調を崩す生徒もちらほらと出てきました。日本にいる時以上に、自分の体調管理には自分で責任を負わなければなりません。具合が悪い時に無理に我慢しても仕方がないので、その代わりに自分の症状や、こうしたいということをきちんと意思表示してくださいね。

本日の午後のアクティビティは”Weta Workshop Tour”です。NZは実は映画産業も盛んで、WellingtonはWellywoodという異名を持っています。今日訪れるWeta Workshopはその中心を担うと言ってもいいほど、数多くの映画に貢献している制作会社です。

本日の移動はバスです



Weta Workshopのマーク

wetaというのは、コオロギの一種だそうです。あえて、気持ち悪いかグロテスクとかそういう扱いを受けているものをシンボルマークにしたのだと教えてくれました。

私もなんとなく、ロード・オブ・ザ・リングやホビットにNZが関わってることや、ラストサムライのロケ地として有名ぐらいの知識でしたが、デザインや美術に関して、これほどまで多くの作品に加わっているのかと驚きました。最初にWeta WorkshopとWeta Digitalを紹介したビデオを見せてもらいました。Weta Workshopは、特殊メイクや衣装、大道具小道具など、実際に身につけたり映画の中で使用されるものを作成しており、架空のキャラクターでも、リアリティを持たせることにこだわってるなと感じました。また実際に身につけた俳優が自然に体を動かせるように、着心地や重さにもかなり工夫がされていることがわかりました。Weta DigitalはVFXに代表されるCG映像などを扱う会社で、画面に出てくる映画を追うだけでも、アバター、キングコング、MIB、インディジョーンズ、アイアンマン、TINTIN、スーパーマン、マッドマックス・・・ええ、これも！の連続でした。

残念ながら、室内の写真撮影や録音は一切禁止でしたが、実際に使用されたものをいくつか手にとらせてくれて、質感を体感することができました。傷口や体の切断部分などは、フェイクだとわかっていても、リアリティがありすぎて怖かったですね。大掛かりな特殊メイクだと、メイクだけで8時間かかることがあったそうです。そんな時は俳優さんが1日目はメイクだけに費やし、一晩寝て次の日に撮影に入るのだそうです。実際の大きさと同じキングコングの頭部があり、顔だけで私の背より高かったです。剥製かと思うほどリアルでした。何より驚いたのは、「キングコングってなんですか〜？」って生徒に質問されたことでした。ドンキーコングなら知ってますって言っていました。

一通り見学コースを通り抜けると、ちょっとしたギフトショップになっていて、ここは撮影もOKでした。ロードオブザリングにも出てきたゴクリ（日本語ではこう表記されていますが、本名はGollumです）も結構リアルでした。もちろんどれもフェイクなのですが、こんなギフトショップの壁でさえも、岩肌にとちょっと苔が生えているところまでもフェイクで作り上げるあたりに、プロ意識というか、やるなら100%というこだわりを感じました。

ゴクリのポーズを真似て





←すいません。この像がなんなのか誰も  
わからないのですが、とりあえず真似てます。

この後は、さらに少し歩いて、Weta Caveという建物に行きました。入り口ではホビットで有名なトルルが迎えてくれます。この施設は一般向けのワークショップなどもおこなっている場所で、もっと時間があれば、特殊メイクや道具作成の見学などもじっくりできるのだそうです。この世界に興味がある人は、期間中に個人で来てみるといいかもしれませんね。毎日午後のアクティビティをお手伝いしてくださっている、OKCインターンのRieさんは、あまりにも好きで、すでに2回来ているって言っていました。

今日はCave入口のギフトショップと、ちょっとした資料コーナーを見学しました。ここでもまた意外な発見があり、「あの映画もねえ」と感心していたのは、私だけだったでしょうか。

Weta Caveの入り口でトルルに襲われかけている少年少女





実際に映画で使用されてたものが、展示されていました



↑ Ghost in the Shell (原作は日本の漫画である攻殻機動隊) のこのマスクも、  
←DISTRICT 9 (邦題は第9地区) のこの武器やキャラクターも、Wetaが手がけているんですね。

ちょっとマニアックなアクティビティだったかもしれませんが、もともとこの会社は若い2人がアパートの1室で始めたんだそうです。最初の仕事は子供向けのテレビ用人形劇だったそうです。とにかく説明のそこかしこに、creative (創造) とかimagination (想像力) という言葉が出てきたのが印象的でした。さらにtraditional (これまでのやり方) という考え方を絶対に否定せず、単に新しいものを追うだけでは良い作品にはつながらないという哲学が貫かれているところに、感銘を受けました。

帰りのバスが来るのを待っている間、ちょっと先にTip Top (NZの有名なアイスクリームブランド) の看板を見つけた女子たち、「せんせ〜、アイス食べに行っていていいですか？」って、おいおい、ちょっとは余韻に浸りましょうよ。明日も元気に登校しよう。